

## 前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義
6. 近代聖書学と宗教史学派
7. キリスト教と社会主義
8. 弁証法神学1——バルト
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子 7/11
13. 研究発表：山田奈緒美、張旋 7/18
14. 研究発表：山下毅、山本恵美 8/1

## <前回>キリスト教と社会主義

### (1) 問題——近代の政治思想としての社会主義

1. 近代という時代の政治状況：国民国家の形成とグローバル化の進展、啓蒙主義  
啓蒙主義の自由と平等を普遍的理念

### (2) キリスト教社会主義とその限界

2. 社会主義：近代——欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成——以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群。

近代の自由主義的資本主義的社会秩序の進展によって発生した諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境など）を社会変革（改良から革命まで）や社会的共同性・相互性によって克服することを志向し、人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等への拡張を含む平等主義）を内容とする道徳的正義と幸福の理念との実現をめざす。

3. キリスト教信仰に基づいた社会正義への理論的また実践的な取り組み  
イギリスを超えて同時代のアメリカやスイス、ドイツ、そして日本へ。  
第二次世界大戦後のフランスの労働司祭運動や解放の神学。

4. アメリカの「社会的キリスト教」

5. アメリカの教派を超えて進展していた「社会的福音」(social Gospel)の主張と一致。

13. チャールズ・E・ガルスト(Charles Ekias Garst, 1853-1898)、ディサイプル派(Disciples)の最初の宣教師として来日(1883)、日本の農村の貧困問題から社会問題全般に取り組んだ。

1884年から秋田で伝道を開始。東北農村は厳しい困窮の中にあった。

15. ガルストの伝道方針：「かれら農民に福音を聞かせるためには、かれらの貧困の問題をともに考え、その解決に努力することが必要」(同、114)との認識に基づいた、「すべての神の子たちを、神の食卓につける計画」(同、42)。

↓

地租増徴論（地主への増税による産業資本家の負担軽減）を主張（地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ）、ヘンリー・ジョージの土地単税論

18. ガルストの土地単税論（キリスト教信仰と社会主義的経済理論との結合）  
 広義に解したキリスト教社会主義（社会的キリスト教、社会的福音、狭義のキリスト教社会主義を包括するキリスト教的な社会思想）の典型的議論。
19. キリスト教社会主義の限界。  
 ・最大の問題：キリスト教社会主義の理想主義が有した、社会的進歩への楽観的見方（楽観的な人間理解と歴史理解）、過度の心情主義。  
 ・R. ニーバーが、「愚かな光の子」として指摘した問題。
21. 20 世紀の現代神学における現実主義の潮流。しかし、19 世紀の自由主義神学あるいはキリスト教社会主義への全面的否定論は、極論か。
22. 「現実」(the real)とは何か。  
 ティリッヒ：歴史的現実を構成する力であるが、この力をどのように捉えるかに従って、素朴現実主義、理想主義、現実埋没的現実主義、信仰的現実主義の四つの類型を提示。
23. Idealismus は、観念論であると同時に理想主義であった。  
 理想を失った現実主義？

## 8. 弁証法神学 1 ——バルト

### (1) 弁証法神学の意義

#### 1. Dialectical Theology

A title applied to the theological principles of K.Barth(q.v.) and his school on the ground that, in distinction from the dogmatic method of ecclesiastical orthodoxy, which treats of God as a concrete Object (via dogmatica), and the negative principles of many mystics, which forbid all positive affirmations about God (via negativa), it finds the truth in a dialectic apprehension of God which transcends the 'Yes' and the 'No' of the other methods (via dialectica). Its object is to preserve the Absolute of faith from every formation in cut-and-dried expressions.

After the publication of Barth's Römerbrief in 1919 the Dialectical Theology rapidly spread, ... (Cross/Livingstone(eds.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Third Edition, 1997, p.476)

Alister McGrath(ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought*, 1993.

*Religion in Geschichte und Gegenwart*, Vierte Auflage (RGG<sup>4</sup>), Band1-8, Mohr Siebeck, 1998-2007.

#### 2. 現代神学の発端（自由主義神学・神秘主義批判）、『時の間』

バルト、ブルンナー、ブルトマン、ゴーガルテン、トゥルナイゼン、メルツなど。

近接して、ティリッヒ、ボンヘッフアー、ニーバー兄弟など。

↓

1920 年代から 60 年代にかけて、プロテスタント神学の主潮流を形成する。

ラーナー、バルタザールなど、カトリック神学への影響。

日本：高倉徳太郎、熊野義孝、桑田秀延、滝沢克己ら、そして次の世代へ。

cf. 1980 年代以降の自由主義神学の再評価の動向

バルトらの弁証法神学の批判的検討の必要性

#### 3. 『岩波 キリスト教辞典』より

「弁証法神学」（寺園喜基）

第一次世界大戦後、1920 年代、ヨーロッパに起こった神学運動、危機神学。主権的な神の自由を強調。バルトの『ロマ書』（1919）に出発点を持つ。人間的体験や内面性を排除

するのではないが、それらを基礎づけるものとして神の自己啓示を強調。19世紀のプロテスタンティズムを自由主義、文化主義、歴史主義と批判。人間は罪人であり、神の言葉を聞くことができるのみ。神の言葉を強調。キリスト中心的な啓示理解を展開し、ヒトラーとドイツ的キリスト者に抵抗。しかし、ゴータルテンは民族主義とナチズムに接近、ブルンナーは自然神学を認め、ブルトマンは実存論的神学へ進んだ。この神学運動は20世紀の神学と教会に大きな影響を与えた。

## （2）バルト神学

### 「バルト（Karl Barth, 1886-1968）」（天野有）

スイスのプロテスタント神学者。ベルン、ベルリン（ハルナック）、テュービンゲン、マールブルク（ヘルマン）で神学を学ぶ。ジュネーブの副牧師を経て1911年からザーフェンヴィルの牧師、10年間「赤い牧師」として労働問題に取り組む。第一次世界大戦を支持する神学教授らに失望し自由主義神学と決別。ブルームハルト父子の影響下『ロマ書』を執筆。以後40年にわたり、ゲッティンゲン、ミュンスター、ボン（告白教会の指導者としてナチ政府により罷免）、バーゼルの各大学で教える。戦中は「反ユダヤ主義は聖霊に対する罪である」としてスイス亡命のユダヤ人救援活動、戦後の西側陣営の核武装に公然と反対。晩年は10年間刑務所で説教。主著『教会教義学』。欧米のみならず、日本の教会・神学にも多大の影響を与え続けている。



ポイント（時期とテーマ）を絞ること、そこから全体へ。

4. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判（戦争神学批判）とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

- ・フォイエルバッハの宗教批判の真理性。
- ・神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

cf. ハルナックとの論争、神学の学問性をめぐって

5. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機 → 危機神学

- ・キルケゴール的モチーフ
- ・ヴァイスとシュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見の影響

終末論、しかも現在的終末論の強調

6. 宗教社会主義運動（スイス）、弁証法神学（危機神学、新正統主義、神の言の神学）の運動——ブルトマン、ブルンナー、ゴータルテンら——

7. アンセルムス論と神学の方法：知解を求める信仰、信仰固有のラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。神・啓示から。楯田に対する円＝キリスト論集中。

神の言葉の神学、教会教義学

8. 1930代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言

- ・弁証法神学を超えて、『教会教義学』（KD、「神の言の神学」）へ
- ・教会闘争、自然神学論争（ブルンナー）

9. 宗教と啓示との峻別

宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、不信仰としての宗教

10. 何を受け継ぐか

キリスト教神学とは如何なる学問か → トランスのバルト論

バルト神学において自然神学は場を持つ。

## 11. まとめ

- (1) フォイエルバッハの宗教批判へのキリスト教神学からの応答の一つの典型。
- (2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。
- (3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。

フォイエルバッハ問題は終わらない。

- (4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。
- (5) ドイツ教会闘争における批判力。

戦後におけるバルトの権威化 → バルト主義の弊害

バルトとバルト主義との相違

- (6) 自由主義神学の過度の否定。

神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。

↓

近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

## <参考文献>

0. バルト関係：『カール・バルト著作集』『教会教義学』新教出版社。
1. ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻3）白水社。
2. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
3. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
4. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社。
5. J.R.フランク『はじめてのバルト』教文館。
6. 大木英夫『バルト』講談社。
7. ユンゲル『神の存在 バルト神学研究』ヨルダン社。
8. 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』『恩寵と類比 バルト神学の諸問題』新教出版社。
9. トーランス『バルト初期神学の展開』新教出版社。
10. 深井智朗『超越と実在 20世紀神学史における神認識の問題』創文社。